〔金属工芸の美展によせて〕

山東省の金銅仏

中国の東部に位置し、黄海を隔てて韓半島と向い合っている山東省は、古代日本の仏像との係りで近年注目されています。山東→韓半島→日本を結ぶ線が、個々の仏像の研究を通して指摘されているのです。筆者もその一役を担った一人として、現地での確認をしたいと願っていました。それがこの度ようやく実現し、短期間ではありますが山東省の主な仏像を見ることができました。多くは石仏ですが、念願の金銅仏も間近かに調査を果たせましたので、今日は、その一部を紹介したいと思います。

山東省の日本からの入口、青島市には関西空港から2時間40分の直行便がほぼ毎日出ています。青島からバスで3時間の諸城市に期待の金銅仏は大切に保管されていました。1978年5月に、諸城県林家村の青雲寺址より発掘された六体の金銅仏です。それらは、諸城市博物館の収蔵庫から副館長の韓崗氏自らの手で、我々の眼の前に並べられました。その内、大きな二体は同じ造りの菩薩像です。

中で、最も古い北魏時代太和14年(490)の銘を光背に刻む像は、高11.0cm。青銅色を呈し、本体と一鋳の四脚座と光背を備えています。頭部・面部共に長目で、ガンダーラ式通肩の衣を身体に密着させ、荒い線刻の襞を伴うのが特色です。山東省の他の地域や隣の河北省からも同形のものが出土し、日本にも何点か所蔵されています。簡略化された造形は、これが大量生産されて多くの需要に答えたものであることを示していましょう。

同じく太和の20年（496）銘を光背裏に刻む金銅如来坐像は背中の枘(ほぞ)に火焔光背を取り付け、四脚座を備え、金色まばゆい、高さ12.4cmの像です。火焔や衣文の彫りは太く強い線で行い、面奥は深く、厳しい顔付きをしています。大衣は左肩を覆った後、背面から右肩に僅かにかかって右脇に降り、右腕をその中から出す着衣法で、太和仏に良く見られますが、その場合、右手は施無畏印、左手は衣を取る形が多いのです。ところが本像は両手を正面で重ねる禅定印を取っている点、また、胸前に現われている僧祇支に多くの襞が彫り込まれている点が珍しいものです。銘文に安平縣（現在の山東省青州市内）人によって造られたとあり、制作地と出土地がほぼ近いことが分かる貴重な例です。

台座と、両脇侍一鋳の光背が残る三尊像が2点あるのも貴重です。2点共に金色が鮮かで、如来立像が中央に立つ像は、東魏時代、全高17.0cm。にこやかな微笑を浮かべた如来は中国式通肩で、衣の裾を僅かに広げ、台座のロート状の蓮肉部を反花座に挿し込んでいます。反花座は蓮弁を二重に伏せ、蓮弁の厚味と蓮弁先の生々としたそり返りに注目される堂々とした作です。光背は全体火焔文の中に、請花上に手を合掌する化仏が三体。両脇侍も合掌のポーズで請花の上に立ち頭飾は兎の耳状のものを両側に広げ、天衣は膝前で交叉させて体側で魚鰭状に段々に張り出させる飛鳥仏タイプです。この仏像と類似の北斉のものが濟南市の山東省博物館にあり、また、韓国の個人蔵に三国時代の例があるので、中国の東魏・北斉→韓国・三国へのルートを示す貴重な作例と考えられています。

もう一方の三尊像は中尊に菩薩立像を配した菩薩三尊像で華やかな頭飾に胸飾・天衣ともに正面で交叉させ、天衣は体側で魚鰭状に段々を造っています。台座は仏像本体と共吹きで、天衣がこれに密着して反花部まで届く長さです。請花部・反花部ともに厚みがあり、脹(ふく)かな厚味のある表現です。火焔光背には請花上の化仏五体をつけ、両脇侍は長身で、天衣を前像とは異なって正面で二段に表わし、体側では魚鰭状に段を造っています。注目されるのはこの脇侍像が乗っている共吹きの台座です。これは、現在は蓮花座とそれを支える茎葉と見えますが、元来は北魏後期に見えている雲竜の口から出る蓮花座であったもので、それが退化変形したと見られます。両菩薩の頭飾が前像とは異なること、中尊像の顔に立体感があることなども、この像を前像より後の北斉として良いかと思われます。

残る二体の同形の菩薩は全高27.5cm。柔和な表情で、頭飾・冠帯を付け、両肩に円形飾り、胸前に円形状の重々しい飾りを付けています。正面で天衣を環に通して交叉させ、体側で天衣を段々に造っていますが、前二像と異なり、天衣が下方で広がらずに、体側に沿って真直ぐに下りる特徴があります。細く長身で、扁平。僅かに体軀を前方にそらせ、衣文は浅く彫り、柔和な表情を持ち、後頭部の枘に頭光を取り付けているなど、百済観音像を思わせる容姿に心が引かれます。同博物館の収蔵庫内で見た北斉の石仏にも頻繁に表現されている浅彫りの上品な衣文処理とも共通し、ロート状の蓮肉部を挿し込んだ、反花座の丈高く優雅なカーブを備えた蓮弁も薄手です。底部の三ケ所の枘は、下方に更に台座が備えられていたことを示し、百済観音が同じように反花座の下に五角形三段の框座を設けていることを思い出させます。北斉の気品に溢れた像です。

以上の様々の様式を持つ山東出土の各時代の仏像は、これらだけで、既に、中国仏像の多様性を示しているようです。

（村田靖子）

諸城市博物館での仏像調査

金銅如来立像
北魏　太和14年

金銅如来坐像
北魏　太和20年

金銅如来三尊像
東魏

金銅菩薩三尊像
北斉

金銅菩薩立像
北斉

季刊 美のたより No.125
平成10年11月13日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.